

# the Axiom of Multiple Choice

alg-d

<http://alg-d.com/math/ac/>

2012年2月17日

定理 1.  $X$  は  $\emptyset \notin X$  なる集合を表すとし,  $\lambda$  は基数を表すとする.  $\text{MC}(X, \lambda)$  で命題

$X$  上の写像  $f$  が存在して, 任意の  $x \in X$  に対し  $f(x) \subset x$ ,  $0 < |f(x)| < \lambda$  を満たす

を表すことにする.  $m \geq 2$  を整数とすると, 次の命題は (ZF 上) 同値.

1. 選択公理

2(m). 任意の  $X$  に対し  $\text{MC}(X, m)$

3. ある整数  $m \geq 2$  が存在して任意の  $X$  に対し  $\text{MC}(X, m)$

4. 任意の  $X$  に対しある整数  $m \geq 2$  が存在して  $\text{MC}(X, m)$

5. 任意の  $X$  に対し  $\text{MC}(X, \aleph_0)$  (the Axiom of Multiple Choice)

証明.  $1 \iff 2(2)$  と  $2(m) \implies 3$  と  $3 \implies 4$  と  $4 \implies 5$  は明らか.  $m \leq n$  に対し  $2(m) \implies 2(n)$  も明らか. なので  $5 \implies 1$  を示せばよい. その為に, 選択公理と同値な命題「任意の順序集合  $(X, \leq)$  は極大反鎖を持つ。」を示す.

$Y \subset X$  が反鎖  $\iff Y$  の任意の異なる 2 元が比較不可能

証明は Zorn の補題・極大原理の定理 1 を参照.

$(X, \leq)$  を順序集合とする.  $\mathcal{P}_0(X) := \mathcal{P}(X) \setminus \{\emptyset\}$ ,  $\mathcal{Q} := \{Y \in \mathcal{P}_0(X) \mid Y \text{ は有限集合}\}$  と置く.  $\mathcal{P}_0(X)$  に仮定を適用して  $f: \mathcal{P}_0(X) \rightarrow \mathcal{Q}$  を得る.  $Y \in \mathcal{P}_0(X)$  に対し  $f(Y) \subset Y$  である.  $g(Y) := \{a \in f(Y) \mid a \text{ は } (f(Y), \leq) \text{ の極小元}\}$  と置けば, 各  $g(Y) \subset X$  は反鎖で,  $\emptyset \neq g(Y) \subset Y$  である. 反鎖  $K$  に対し  $Y(K) := \{x \in X \setminus K \mid K \cup \{x\} \text{ は反鎖}\}$  と定義する.

$X$  が極大反鎖を持たないと仮定する. 各  $Y(K)$  は空でない.  $\aleph \leq |\mathcal{P}(X)|$  となる最小

のアレフ  $\aleph$  を取る．写像  $h : \aleph \rightarrow \mathcal{P}(X)$  を

$$h(\alpha) := \bigcup_{\beta < \alpha} h(\beta) \cup g\left(Y\left(\bigcup_{\beta < \alpha} h(\beta)\right)\right)$$

と定義すると，これは単射になるので矛盾する．故に  $X$  は極大反鎖を持つ．  $\square$

「AMC(=the Axiom of Multiple Choice)  $\implies$  選択公理」の証明に使われている命題を追っていくと，「AMC  $\implies$  選択公理」のこの証明には基礎の公理が使われていることが分かる．実は基礎の公理を仮定しない場合，「AMC  $\implies$  選択公理」は証明できないことが知られている．一方，定理における  $4 \implies 1$  は基礎の公理無しで証明することができるので，その証明を書いておく．

証明．選択公理と同値な次の命題を示す．

任意の集合  $X$  に対しある正整数  $m$  と順序数  $\alpha$  と  $\alpha$  上の関数  $f$  が存在して

$$\forall \beta < \alpha (|f(\beta)| \leq m) \text{ かつ } X = \bigcup_{\beta < \alpha} f(\beta)$$

整列可能定理についての定理 3 の条件 4 のこと．証明は整列可能定理についての一番最後を参照．

$X$  を任意の集合として  $\mathcal{P}_0(X) := \mathcal{P}(X) \setminus \{\emptyset\}$  と置く．仮定 (定理の条件 4) によりある正整数  $m$  とある関数  $g : \mathcal{P}_0(X) \rightarrow \mathcal{P}(X)$  が存在して任意の  $Y \in \mathcal{P}_0(X)$  に対し  $g(Y) \subset Y$ ,  $0 < |g(Y)| < m + 1$  を満たす． $U \notin X$  となる集合  $U$  を一つ取り， $g(\emptyset) := U$  と定義しておく．アレフ  $\aleph$  で， $\aleph \not\leq |\mathcal{P}(X)|$  となるものが存在するので，そのような  $\aleph$  のうち最小のものを取る．順序数  $\alpha < \aleph$  に対し

$$G(\alpha) := g\left(X \setminus \bigcup_{\beta < \alpha} G(\beta)\right)$$

で写像  $G : \aleph \rightarrow \mathcal{P}(X) \cup \{U\}$  を定める．明らかに， $G(\alpha) = G(\beta) \neq U$  ならば  $\alpha = \beta$  である． $G(\alpha) = U$  となる  $\alpha$  が存在しないと仮定すると， $G : \aleph \rightarrow \mathcal{P}(X)$  は単射となる．しかしこれは  $\aleph \not\leq |\mathcal{P}(X)|$  に矛盾する．従って  $G(\alpha) = U$  となる順序数  $\alpha$  が存在するので，そのような  $\alpha$  のうち最小のものを取る．このとき  $f := G|_\alpha$  とする  $U = G(\alpha) = g(X \setminus \bigcup_{\beta < \alpha} G(\beta))$  だから， $\bigcup_{\beta < \alpha} G(\beta) = X$  である．また  $\beta < \alpha$  に対し  $f(\beta) = G(\beta) = g(X \setminus \bigcup_{\gamma < \beta} G(\gamma))$  だから  $g$  の性質より  $|f(\beta)| \leq m$  が分かる．よってこの  $f$  が条件を満たす．  $\square$

## 定理 2. 選択公理

$\iff$  集合  $X$  が「任意の  $x \in X$  に対し  $|x| \geq 2$ 」を満たすとするとき,  $X$  上の写像  $f$  が存在して「任意の  $x \in X$  に対し  $\emptyset \neq f(x) \subsetneq x, |f(x)| < \infty$ 」を満たす.

証明. ( $\implies$ ) 明らか.

( $\impliedby$ )  $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$  を互いに素な非空集合の族とする.  $\mathcal{P} := \left\{ A \subset \bigcup_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda \mid |A| \geq 2 \right\}$  として  $\mathcal{P}$  に仮定を適用し写像  $f$  を得る.  $|A| = 1$  となるような  $A \subset \bigcup_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$  に対して  $f(A) := A$  として  $f$  の定義を拡張しておく.  $S := \bigcup_{\lambda \in \Lambda} \bigcap_{n=0}^{\infty} f^n(X_\lambda)$  と置く. (但し  $f^n$  は  $f$  の  $n$  回合成である.) このとき  $S$  が  $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$  の選択集合である.  $\square$

定理 3. 次の命題は (ZF 上) 同値.

1. 選択公理
2. 集合  $X$  が「任意の  $x \in X$  に対し  $x \neq \emptyset$ 」を満たすとするとき,  $X$  上の写像  $f$  が存在して「任意の  $x \in X$  に対し  $\emptyset \neq f(x) \subset x, |f(x)|$  は奇数」を満たす.
3. 集合  $X$  が「任意の  $x \in X$  に対し  $|x| \geq 2$ 」を満たすとするとき,  $X$  上の写像  $f$  が存在して「任意の  $x \in X$  に対し  $\emptyset \neq f(x) \subset x, |f(x)|$  は偶数」を満たす.

証明. AMC  $\implies$  選択公理により明らか.  $\square$

定理の条件 2 を OAC (= Odd Axiom of Choice), 3 を EAC (= Even Axiom of Choice) という. この証明は勿論基礎の公理が使われているが, 実は基礎の公理無しで次のことが言える.

定理 4. 選択公理  $\iff$  OAC かつ EAC

証明. 定理 2 を使う. 集合  $X$  が「任意の  $x \in X$  に対し  $|x| \geq 2$ 」を満たすとする.  $X$  に EAC を適用して写像  $g$  を得る. 集合  $\{g(x) \mid x \in X\}$  に OAC を適用して写像  $h$  を得る. このとき  $x \in X$  に対して  $f(x) := h \circ g(x)$  と置けば写像  $f$  は「任意の  $x \in X$  に対し  $\emptyset \neq f(x) \subsetneq x, |f(x)| < \infty$ 」を満たす.  $\square$

## 参考文献

- [1] Horst Herrlich, Axiom of Choice, Springer, 2006

- [2] H. Rubin and J. Rubin, *Equivalents of the Axiom of Choice II*, North Holland, 1985.
- [3] K. Keremedis, *Bases for Vector Spaces over the Two-Element Field and the Axiom of Choice*, *Proc. Amer. Math. Soc.* 124 (1996), 2527–2531